

民族学から観光文明学へ

石森 秀三

(いしもり しゅうそう)

北海道大学
観光学高等研究センター



ミクロネシア・サタウル島 1978年(須藤健一撮影)

甲南大学経済学部卒業。ニュージーランド・オークランド大学大学院に留学後、京都大学人文科学研究所研究員を経て、1975年に民博に着任。放送大学客員教授。ミクロネシアでフィールドワークをおこなった後、世界各地で観光に関する調査をおこなう。専門分野は、観光文明学、文化開発論、博物館学。観光立国懇談会委員、国土審議会専門委員、文化審議会専門委員などを歴任。『危機のコスモロジー』（福武書店、1985）で大平正芳記念賞受賞。著書・編著書に『観光の20世紀』（ドメス出版、1996）、『博物館概論』（放送大学教育振興会、2003）など多数。



私は今から二八年前に、ミクロネシアのサタウル島でフィールドワークをおこなった。そのさいに、幾人かの幼児が激しいひきつけを起こして、高熱をだし、死に至ることがあった。見舞いに行くと、「この病気が何か知っていているか」「何かよい薬をもっていないか」と問いかけられた。いつも島の人たちにお世話になるばかりだったので、何かお返しがしたいと思っただけで、医学の素養のない私は何もしてあげられなかった。

そのときに、民族学者とは一体何者か、とつくづく考えさせられた。死にゆく幼い子どもを命すら救えないような学問に価値があるのだらうかと思ひ悩んだ。近代文明から隔絶された絶海の孤島という、極限状態のなかで思いつめたといえ、島の人びとの世話になるばかりの自分に対して恥ずかしい気持ちでいっぱいであった。さらに、民族学はある社会的知的財産を収奪するだけで、何もお返しがない学問ではないかという、懐疑も生じた。

世話になったサタウル島の人びとに対するせめてものお返しの意味を込めて、共同調査者であった秋道智彌氏（現総合地球環境学研究所教授）と須藤健一氏（現神戸大学教授）らと一緒に「サタウル語・英語辞典」の編纂プロジェクトを立ち上げた。編纂作業は順調に進んだが、言語学者による最終チェックが完了していないために、まだ刊行に至っていない。私自身の言語学の素養が乏しいために長らく悩み続けてきたが、昨年、オセアニア言語学を専門とする菊澤律子さんが民博助教として着任され、辞典編纂プロジェクトに加わっていただいたので、大きく前進している。平成一八年度内に辞典出版のめどがついたので、嬉しく思っている。

私は二〇年ほど前に、諸般の事情から観

光学」にシフトした。当時の観光学は観光事業論やホテル経営論など供給サイドに立脚した実学志向のために、学界のなかでは不当に軽視されていた。私は観光学に新しい息吹を吹き込むために、「観光・観光学」運動を展開するとともに、「観光革命」観光ビッグバンと文明の磁力「自律的観光」観光文明学」などと、新しいコンセプトを提起し続けた。

さらに、二〇〇三年には小泉首相の発議で立ち上げられた観光立国懇談会のメンバーとして首相官邸に何度も出かけて、観光立国政策の基本方向について諸提言をおこなった。日本では長らく、観光は国家的課題とみなされていなかったのに、国家政策の大きな転換点に立ちあえたのは幸運であった。

二〇世紀には軍勢力や生産力などのハード・パワーが他国に威力を与える源泉であったが、二一世紀には知力や文化力や情報力などのソフト・パワーが他国に影響を与える源泉になる。今後日本が観光立国を推進し、そのソフト・パワーの強化の力を入れていけば、世界的可能になる。また、観光立国を示すことが可能になる。自の力を示すことが可能になる。

北海道大学は今年四月における「観光学高等研究センター」の新設を決定し、私にセンター長としての就任要請をおこなった。来年四月には観光学大学院を設置する計画なので、喜んでお引き受けした。「熟年よ、大志を抱け！」の心境で、今年四月から北の新天地で観光学の高等研究・教育拠点の確立をめざして、仕事を進めている。最後に、新しい学問分野へのチャレンジを許容してくれた民博に対して感謝の意を表したい。